

運河コース

空海ロードの2区域めは水路で進む「運河コース」。運河沿いには空海伝説が生きていた。

揚州 京杭大運河

北京から杭州まで、黄河と揚子江を横断する大運河で、総延長は2500キロ。隋の煬帝によって開かれ、唐代に整備された。空海が通ったであろう唐代の運河は、現在古運河と呼ばれる。



杭州・蘇州

明代の空海像が出迎える

杭州から開封までは、運河を利用しての移動となる。この運河は隋の煬帝が開き、唐代に整備されたものである。杭州はその最南端にあたる。唐代の運河は「古運河」と呼ばれ、現在使用されているものもあれば、消滅してしまったものもある。新しい運河と共に、現在も物流の大動脈として生きている。

空海一行は大運河を使用して蘇州へ向かったといえるが、何より長安を目指して急いでいたようである。杭州市街と空海の関係についての痕跡は、明確にはなっていない。

蘇州へ着くと、古運河は古刹・寒山寺の門前を通る。空海がここに立ち寄ったかは定かではないが、訪ねたと考えてよい。804年の往路は無理でも、806年の復路では立ち寄ることができただろう。最近、寒山寺は回廊の一部を

金山寺

鎮江北西部の金山（標高50メートル前後）に建つ寺。317～420年の創建と伝わる。写真は巨大な仏塔（金山塔）から見た広大な境内（★）。



靈巖山寺 明代の空海像

1950年頃に靈巖山寺に寄贈された空海像（2体のうちの1体）。その後の調査で明代の作と推測されている（★）。



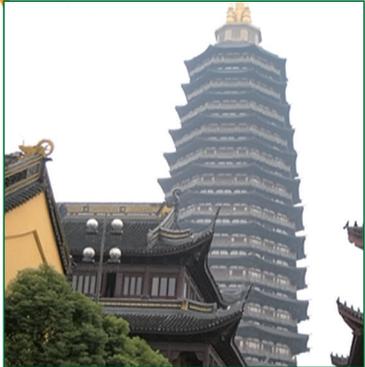
寒山寺

蘇州市にある臨済宗の寺院。境内には修行大師（空海）堂が建てられている。唐代の詩人・張継が詠んだ漢詩「楓橋夜泊」の石碑も有名（★）。



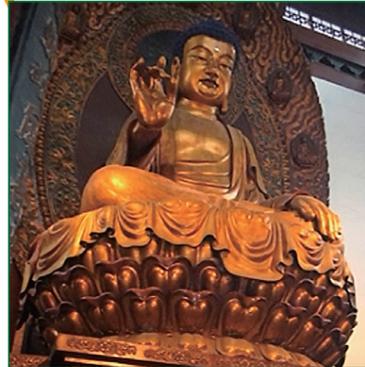
大明寺

鑑真が住職だったことで知られる寺。境内には70メートルの栖霞塔が建ち、日本から贈られた鑑真像も安置されている（★）。



天寧禪寺

唐代の655年創建の古刹。「空海上人留学所」の看板が残されていたことで、日中戦争の戦火を免れたと伝わる。巨大な宝塔は2007年に建立されたもの（★）。



寒山寺 木彫釈迦如来像

寒山寺には、中国最大の木彫像・釈迦如来像がある。2005年には総重量108トンの巨大鐘が設けられ、新たな目玉として人気を集める（★）。



船から見た寒山寺

運河を行く船から見た寒山寺。最近つくられた、とてつもない大きな「楓橋夜泊」（唐代の詩人・張継作の漢詩）の石碑と「鐘樓堂」が見える。

崩して修行大師像が建立されている。蘇州市郊外の小高い丘の上には、靈巖山寺がある。この寺には、1984年に私たちが訪れる前から、空海大師像が2体安置されていた。像高は30センチほどで、像の裏側には「空海像」と彫られている。住職の話では、1950年頃に密宗の信徒が寺に預けたものだという。この方はすでに他界されたもの由来は不明であるが、明代の頃のものと推測されている。

※本記事は『高野山大学選書 第5巻 現代に生きる空海』（小学館スクウェア）の「現代中国に甦る空海」著／静慈園をもとに構成しています。 ※（★）印がついている写真は、静慈園氏が団長を務めた「空海ロード巡礼」にて撮影されたものです。写真は巡礼地の一部を紹介したもので、これがすべてではありません。



「龍潭春櫻」と書いた自然石の前で、何思源先生(右)と。

間、「白龍潭」というところがある。白龍潭とは何か、について触れておきたい。ここ20年来の中国では、自転車が自家用車に変わった。そのため、中国全土に高速道路が

関西空港から杭州空港へ飛んだ。空港に中国人の空海信者が待っていた。台湾から1名、香港から2名、広州から3名、河南から2名、上海から2名、広西から1名の11名である。私たち21名と合わせて日中混合の32名での巡礼となった。

白龍潭で空海研究家
何思源先生に迎えられる

静慈園 運河コース
紀行レポート
2012年
4月1日~7日

できた。各都市においては、交通渋滞、駐車スペースなどが問題となっている。自家用車を持つと、当然行動範囲が広がる。休みの日には家族でドライブを楽しむようになり、車社会の要求に応える場所が必要となった。白龍潭は上海、杭州などの人が楽しめる保養地としてつくられたのである。広さは、ちょうど高野山ほど、深山幽谷の土地で、中心を川(溪流)が流れている。遊歩道があり、古式建築のホテル、コテージもつくられている。有楽地である。溪流の両側には、桜が3000本植えられた。中国の都市構造計画に、このような保養地計画があるところだなされている。白龍潭をつくっているのは何思源という方。何思源先生は、政府から委託



大明寺の修行大師像
空海ロード、運河コースの揚州にある大明寺に安置された修行大師(空海)像。空海が唐にいた31~33歳の頃の若々しく、力強い姿が表され、多くの信徒が祈りを捧げにやってくる(★)。

無錫・常州・鎮江・揚州

空海ゆかりの古刹が並ぶ

古運河は、蘇州から無錫の市街を通り、常州へと続く。常州市街には、天寧禪寺という寺がある。古運河はこの寺の門前を通って

おり、空海が門前の船着場で下船して、石段(唐代のもの)をのぼり、天寧禪寺へ入っていったと推測するのは、ごく自然なことである。しかし、現在船着場は使用されていない。1984年に訪問した際、住職が語った話によれば、以前、天寧禪寺の四天王殿の前には「空海上人留学所」

と書かれた看板があった。日中戦争の際に日本軍がやってきたが、その看板を見てこの寺を守ったという。空海は長安からの帰りにも、この寺に立ち寄ったとも語った。

天寧禪寺は現在でも江南第一の禅林と呼ばれる。現在は巨大な仏塔が建立されている。

大運河は鎮江へと続く。鎮江には金山寺と定慧寺という古刹がある。特に金山寺には空海と関係する詩が残っている。それは、空海上人を偈んで書かれた七言絶句の詩三首である。詩の右には「空海上人修行古刹」または「弘法大師修行古刹」と書かれている。ここにも空海伝説が生きていたのである。

揚州に入ると、鑑真を通して日本にもなじみの深い大明寺がある。境内には修行大師像が建てられている。また、敷地内には僧侶教育を行う鑑真学院があり、学院での授業のなかには英語で行われるものもある。寮も完備され、留学生の受け入れ態勢も万全に整っている。

されて保養地計画を、数カ所手がけている。何思源先生は日本にも知られ、日本の各地を巡察された。高野山にもこられた。学者でもあり、空海の研究者でもある。白龍潭で何思源先生に迎えられた。入り口前に、広い駐車場があり、ホテルもある。入り口に近づく、自然石が置かれ、「龍潭春櫻」と大書されている。実はこの字、私が書いた書である。

何思源先生は、楽団を引率され、自らも少数民族の服装で「葫蘆絲」という笛を吹かれ、私たちを歓迎してくれた。この地方の文化人も集まり、書画を即興で書き、交流が始まった。

私には、課題が与えられた。詩のなかに白龍潭の文字がある杜甫が読んだ詩の一節「聞道天堂龍門山、岸飛瀑白龍潭」を書くというものだった。

世界遺産「大運河」の
景勝を愛でる旅

杭州は秦・漢時代から銭塘県として、この地方の中心地であった。隋代

以来杭州となり、余杭郡といった。唐代から「天に天堂あり、地に蘇杭あり」(訳：天には極楽があり、地には蘇州・杭州がある)という諺が生じ、蘇州と並ぶ中国屈指の景勝地として知られている。明・清時代を通して浙江省の首都である。

杭州は、隋の煬帝(569〜618)が開いた大運河の最南端でもある。煬帝は、盛んに土木事業を起こした。男女100万人を動員して、黄河と淮水とを結ぶ「通済渠」を開いた。江南地方は、春秋のとき、呉が「邗溝水」(現在の江南の運河)を築いていた。煬帝はこれを改修して、淮水と揚子江を結んだ。608年には、黄河から北に北京方面の涿郡にいたる「永濟渠」をつくり、610年には、揚子江から杭州にいたる「江南河」をつくった。ここが大運河が完成した。

今回の旅は、まさに江南の春の旅である。我々は、杭州市の北方の埠頭からチャーター船に乗った。3年前の運河コースのときは、運河コース周辺の町は建築ラッシュが始まり、機材置き

場となり、まるで敗戦都市のようなあり様であった。したがって運河は汚れ、砂利などの荷物を満配した船が、数珠つなぎで航行していた。

今回は、まったく様相を異にしている。砂利を積んだ船は、行き来しているが、運河の水もきれいだ。それに運河の左右の土手は、柳が芽を吹き、美しい景観をなしている。周辺の建物も、古代の町のように復元されている。すっかり様変わりして、観光コースになっていた。それに水上バスの船が運行され、地域の人の足となっている。観光船も浮かんでいる。運河は、現代的に甦っていたのである。

3時間ほどの船旅を終えて下船した。私がかつて15年ほど前に、チャーター船で1日中運河を航行したことがある。川幅は次第に狭まり、左右に菜の花畑がどこまでも続いていた。また1日中バスで走ったこともある。ただただ走った。変化はなかった。どこまでも広い中国を見ただけであった。「蘇州・蘇州と人馬は進む。……」という歌があるが、まさにその通り、中国は

真が記録として経蔵に保存されている。

■寒山寺(蘇州)

「鐘が鳴る鳴る寒山寺」である。空海は、門前を通る古運河で下船、寒山寺を訪問したのであろう。秋爽住職とは、十数年のおつき合いである。秋爽住

職に迎えられ、接待をうける。寒山寺には、修行大師像があり、まずお大師様にご挨拶をする。寺内を秋爽住職が案内くださる。寒山寺は、寺の敷地を拡張、2007年から新しく2つの建物をつくった。

1つは、世界最大の石碑である。ギネスブックに登録されている。大碑の高さは16・9メートル、厚さは1・5メートル。唐代詩人張繼の七言絶句「楓橋夜泊」「月落烏啼霜滿天 江風漁火對愁眠 姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲到客船」が刻まれている。

もう1つは、世界最大の鐘で、こちらも



寒山寺の世界最大を誇る石碑(写真左)と鐘(写真中)、寺の前での集合写真(写真右)。

広いとの実感である。船の速度は遅い。空海は運河で、蘇州、無錫、常州、鎮江、揚州と急いだ。

空海ゆかりの
運河コースの寺々

■靈巖山寺(蘇州)

靈巖山上にある古刹である。私は1984年、「弘法大師御入定二一五〇年御遠忌」として「空海長安への道」と題し、この寺を初めて訪問した。明学法師が住職であった。以後、度々この寺を訪問した。明学法師は90歳になっておられるが、寺の奥まった一角にある接待所でニコニコお待ちくださった。最近是人にお会いにならないようであるのに、ありがたいことである。



靈巖山寺に鎮座する2体の空海像。

この寺の経蔵の2階に、空海像が2体ある。これも1984年に明学住持が教えてくれた。また初めて訪れたときの写



天寧禪寺のご住職と。



天寧禪寺の一角にある、空海が使用したと伝わる井戸。

ギネスブックに登録。大鐘の重さは108トン、高さ8・5メートル、鐘の底の直径は5・2メートルである。鐘が中心にあり、お堂は鐘の囲いである。世界一をつくるのはこのことか。ただただ呆れるのみである。3年前は、この2つが広い境内に完成したところだったが、境内全域が見事な庭園となっていた。すごい経済が動いている。

■天寧禪寺(常州)

この寺は、649年に創建。寺名は、いろいろに変わったが至元年間(1335〜1340)に天寧寺となり、現在にいたっている。

開山の法融法師は「牛頭の禪師」として名を馳せ、多くの寺を建立した。法融法師の名前にひかれて、日本の空海大師が留錫したとの寺伝がある。私は1984年に初めて訪問したが、そのときこの寺が、空海によって救われたことを知った。それを証明するかの

ように、「四天王殿の門前の壁に「弘法大師留学所」と書いた看板が解放前まではかけられていた。日中戦争時に、この地方にきた日本軍は、この看板を

見てこの寺を守ったと住職は話した。

私が初めて訪問してから28年が経過した今日、この寺は大きく変わった。境内に八角形の巨大な13層の塔(46ペー ジ掲載)ができた。高さは153・79メートル。世界最大の仏塔といわれているが、もはや塔ではない。大きなビルがそのまま塔の形をしているのである。エレベーターが3台あり塔に登ると、常州市が一望できる。この塔は寺の経営ではない。したがって60元払った。この寺の一角に井戸がある。空海が使用したとの伝承があり、大切に保存されている。

■金山寺・定慧寺(鎮江)

私は1984年に金山寺を初めて訪問した。私たち一行のために、当時の住職が金山寺の宝物蔵から、空海にま



定慧寺の山門(写真右)と、
境内奥に聳える塔(写真左)。

つわる七言絶句を3種見つけ出していた。いずれも「鎮江金山寺善性書」で「空海上人修行古刹」と書かれていた。この辺りには「空海の修行古刹」としての伝承が残っているようである。

定慧寺は、長江のなかに孤立する中洲にある。フェリーで渡る。1984年のときは、茗山法師がおられた。この地方の名士で政界、仏教界に名を馳せていた。「空海長安への道」の私の行動を取り仕切ってくれた。現在茗山法師は他界されたが寺内に「茗山紀念堂」があり、そのなかには、初回訪問の私たちの写真も納まっている。

■大明寺(揚州)

鑑真和上(688~765)が住職された寺として、日本にはなじみ深い寺である。大明寺には、唐招提寺を模した「鑑真紀念堂」が建立され、唐招提寺から贈られた、鑑真の里帰り像がある。また「修行大師像」も建っている。「大明寺書画院」があり、盛んに文化交流に力を入れている。

特筆すべきは、「鑑真学院」

である。国際仏教センターの構想である。広い敷地に「鑑真図書館」、寮なども完備され、国際的に講師を招き、仏教教育を始めている。英語で教育をしていた。日本語や諸外国語の授業もあるそうだ。「鑑真学院」前の道路には、300メートルの美しい桜街道があった。今回の巡礼の帰り、上海「静安寺」に寄った。この寺の前住職、持松法師(1894~1972)は、二度高野山を尋ね、天徳院の金山穆韶阿闍梨から密教を授かった中国でただ一人の阿闍梨であった。現在の住職は慧明法師で、復旦大学で学位を取得した。私は十数年のつきあいである。

この度は、住職から団員に精進料理の招待を受けた。そのうえ私には、慧明法師の知友復旦大学教授韓昇夫妻も同席して、古希のお祝いのケーキが用意されていた。ほかに陶器の急須を贈られたが、その表面には空海の線描きの御影と、私が書いた悉曇文字が刻まれている。最高の贈り物をいただいたのである。感謝このうえない。

中国全土で、仏教伽藍は美しく甦つ



静安寺、大雄宝殿に鎮座するご本尊。

た。そのなかでも、ここ静安寺は中国随一の伽藍。すべての材木は、南方の国から取り寄せた香木である。大雄宝殿の本尊は、15トンの白銀で完成された。慧明法師はいう。

「中国全土で仏教の伽藍の復元は、ほぼ完成をえています。これからは僧侶の教育です。密教もまずは学問から始め、次は修行(事相)です。阿闍梨を育てるのです。静安寺には、密教の道場をつくります」

慧明法師の言葉の如く、中国では3年前から急に、密教の国際学会が始まった。大学と寺院が手を組んで国際学会を始めたのである。すでに3回行った。しかし日本の密教学者、僧侶共に、中国への関心は薄い。私は日本の密教にとって

は、手厳しい時代となったことを実感している。

なお、この旅では民族の歴史とは何かを考えるために南京も訪問した。